

Inter-Faculty project

『『地域生活学研究会』の創出のための学際的共同研究』報告

平成21年度学長裁量経費研究プロジェクト

富山大学芸術文化学部教授 伊藤 裕夫

はじめに

地域生活学研究会は、富山大学の文系4学部（人文学部、経済学部、人間発達科学部、芸術文化学部）の教員有志によって始められた活動である。研究会を始めるに至った経緯は、直接的には平成19年から20年にわたって検討されてきた人社芸術系総合大学院の人間環境学専攻の創設に関わった人文、人間発達科学、芸術文化の3学部の教員が、相互理解のために始めた交流会がきっかけになっているものの、その背景には6年前の3大学統合による新富山大学設立以来の学部間交流と、それを通じた学際的な共同研究——特に富山という地域ならではの——の希求があった。そうして始まった交流会が、新大学院構想が頓挫した後、その頓挫の一因に融合的な研究教育分野のコンセプトがもうひとつ明確ではなかったという指摘もあって、基盤となる研究領域を模索すべく平成21年度の学長裁量経費の共同研究として、経済学部の教員等にも声をかけてスタートしたものである。

平成21年度の地域生活学研究会のメンバーは以下の通りである。

竹内 潔 (人文学部准教授・生態人類学) 研究会代表
大西 宏治 (人文学部准教授・人文地理学)
龍 世祥 (経済学部教授・環境経済学)
柗座圭太郎 (人間発達科学部教授・地学/気象学)
諸岡 晴美 (人間発達科学部教授・感性デザイン工学)
黒田 卓 (人間発達科学部教授・情報教育)
武山 良三 (芸術文化学部教授・サインデザイン)
伊藤 裕夫 (芸術文化学部教授・文化政策)

また平成21年度の主たる活動は、以下の通りである。

1. 月に1回程度の研究交流会
2. 講演会・フォーラムの開催
3. 『地域生活学研究』第1号の刊行

以下、講演会とフォーラムを中心に活動の概要を報告する。

1. 講演会「生活、地域、環境」

講演会「生活、地域、環境」は、地域生活学研究会の主催で、平成21年12月16日に、富山大学五福キャンパス黒田講堂の会議室にて開催された。開催趣旨は、以下の通りである。

「昨今の『エコ』という語の流行に見られるように、環境と調和的な生活に対する社会的関心は非常に高まっています。このような社会的関心を実践につなげていくためには、まず、人間生活・地域と自然環境の多面的で複雑な関わりの様相について、具体的な例をもとにして学びとっていく必要があります。

この講演会では、地域や生活と環境の関わりの実例について、人間と環境の関係について考究されているお二人の講師に平易に語っていただき、講演を受けて、環境調和型の社会や生活の将来像について討論をおこないました。」(『地域生活学研究』第1号より)

招聘した講師は、東京大学名誉教授で自然環境研究センター理事長の大塚柳太郎氏と、慶應義塾大学理工学部教授の佐藤春樹氏である。大塚氏は、「途上国の農村地域の開発が人間—環境系に及ぼす影響：ソロモン諸島西部州と中国海南島の調査から」というタイトルで、まず地域生態系と開発に関する人類生態学の視点として、「エコ・commons」「合意形成」「環境的正義」「在地リスク回避」という4つのキー概念を示し、コミュニティが開発によって環境保全とコミュニティの発展の調和をどう両立させていくかという調査の枠組みを述べ、二つの地域の状況について講演された。また佐藤氏は、「多分野コラボレーション型アプローチ：木の葉に学び森と生きるシステムデザイン」というタイトルで、都市のヒートアイランド化を取りあげ、その対応として「人と社会」「人と自然」の両立を「水の循環(確保)」として捉え、そのモデルを「木の葉」の仕組みに見だして循環型社会のあり方を提起された。そしてその後、竹内准教授の司会で柗座教授、諸岡教授、龍教授がコメントし、地域と生活と環境の関わりについて検討した。



2. 快適で活気ある富山を考える地域づくりフォーラム

「快適で活気ある富山を考える地域づくりフォーラム」は、平成22年1月31日、やはり地域生活学研究会の主催で、富山市のフォルツァ総曲輪にて開催された。開催趣旨については、「地域生活学研究」第1号には以下のようにまとめてある。

「近年、日本各地で『地域づくり』についての議論がさかんにおこなわれています。議論でとりあげられるトピックは、地域の産業振興などの経済的施策、福祉の充実や防災・防犯などの安心や安全につながる方策、地域の景観や環境の保全の方途、地域の伝統文化の保存や再活性化の考案など、じつに多様です。

『地域』は人間の生活空間で、人間の生活にはさまざまな側面があるので、『地域』をより良いものにしようと考えるときに、さまざまな観点からの議論が出てくるのは当然といえるでしょう。

このように地域づくりにはさまざまな側面がありますが、生活者の視点から考えれば、地域づくりとは、自分たちの生活環境をより良いものに創り変えていこうとする『暮らしづくり』に他なりません。そして、より良い暮らしとは、人との交流の『活気』のある環境で自分にあった『快適』な生活を送ることだと考えられます。生活の『快適』さと地域の『活気』が両立する、いわば『快活』な生活の環境の構築こそが、生活者の視点から見た『地域づくり』だと言えるでしょう。

このフォーラムでは、『快適で活気のある』地域づくりについての将来像を参加者の間で考えていく試みをおこないました。フォーラムでは、まず、北陸地域を中心とした地域づくりの様々な具体的な事例について、地域について考究されている研究者や実践的な活動に携わっていらっしゃる方々、さらに、地域の観光化について調査をおこなった学生に報告していただき、パネルディスカッションでは、報告を触媒としながら、このフォーラムに参加した全員で、生活者としての視点と立場から地域と暮らしのさまざまな側面について議論をおこない、意見を交換しました。」

フォーラムでは、まず早稲田大学教育・総合化学学術院

教授の宮口侗迪氏と、京都大学名誉教授で文化政策・まちづくり大学院大学設立準備室長である池上惇氏からの基調講演（講演タイトルは、それぞれ、宮口氏「変革の時代の富山の地域づくり」、池上氏「現代の都市・農村の再生と広域発展：文化資源を活かす“まちづくり”の実践例を中止として」）を受け、「地域コミュニティの再生と再創造」と「地域におけるヒトと情報の移動と循環」の2つのセッションで報告がおこなわれた。「地域コミュニティの再生と再創造」セッションでは、福井県立大学学術教養センター長の杉村和彦氏から「田舎学の構築—遊作の試み」、富山大学人文学部准教授の大西宏治氏から「子どもたちが創るまち—ミニ・ミュンヘンと未来ぼ〜ろ」、富山大学人文学部4年生の安田莉奈さんから「八尾のおわらの観光化」の3本の報告があり、地域におけるヒトと情報の移動と循環」セッションでは、地域鉄道問題研究所代表の清水省吾氏から「地方公共交通の再生—地域鉄道再生の潮流」、シクロシティ株式会社の猪爪勇斗氏から「シクロシティ富山（自転車市民共同利用システム）について」、富山大学人間発達科学部教授の黒田卓氏から「ICTを用いた地域づくり—富山インターネット市民塾の取り組みから」の3本の報告があった。そしてその後、竹内潔富山大学人文学部准教授の司会で、地域生活学研究会のメンバー全員によるパネル・ディスカッションを行い、「快適で活気ある」地域づくりへの課題について討議した。

おわりに

上記の講演会と地域づくりフォーラムでの報告（説明資料・参考論文など）と、地域生活学研究会メンバーによる個人的研究成果をまとめ、年度末に「地域生活学研究」第1号として刊行した。

なおこの地域生活学研究の試みは、『地域生活学』の研究拠点形成」という形で、平成22年度も学長裁量経費を得て、新たなメンバーも加えて継続している。